

ものづくりを基本とした経済から、金融や情報でお金が回る資本主義へ。68年の思想は、こうした変化とも並走した。脱・成長主義を掲げ、資本主義の制御を模索する思想家の佐伯啓思さんに対し、京都人文科学研究所の王寺賢太准教授は68年の「出来事」の可能性に注目する。暴走する資本主義をめぐって、2人の議論も加速していく。

佐伯 「68年の思想」。一番のポイントはどこにあると考えていますか。

王寺 日本では80年代に「ポストモダン」とか「現代思想」とか言ってもはやされたのが、まさに「68年の思想」でした。一般に「主体」の批判がよく知られています。けれども「構造」の外に「主体」があるのではなく、「主体」こそが「構造」のなかにある、という認識。さらに、人間と人間の間を律する「構造」を言語の次元で捉え、ひとつの「象徴秩序」として考えたのが、ポイントだと思います。

今は、人間の行動や歴史をビッグデータで統計的に捉えたり、脳科学のように生物学的なレベルで人間の営為を説明しようとする動きが活発です。でも私は、人間がすべて科学的に解明されたところで、やっぱり人はしゃべり続けるだろうし、人と人が話すことでしか生まれない事象があり、それは自然科学的手法では捉えきれないと思っています。話す存在としての人間、人間たちの語り合いに特有の次元を見



王寺賢太さん

脱・成長主義!

佐伯啓思さんが

フランス文学・思想研究者 王寺賢太さんと語る ①

◆ 象徴秩序の穴

わめようとするわけです。

佐伯 今の話を聞いて、レオ・シュトラウス(1899~1973年、ドイツ出身の政治哲学者)を思い出しました。彼は、近代についてこう言っています。哲学と科学が分離し、科学が勝利した時代だ、と。哲学は「人が幸福に生きる」とはどういうことか、「よりよい社会とは何か」といったように「価値」を問う学問です。一方の科学は法則を探り、事実の記述に徹する。価値は不問に付し、すべてを数学的論理の世界として構築する学問です。

五月革命 語り合い一つに



佐伯啓思さん

けれど、わたしたちは現に言葉をしやべっている、日常生活は科学的論理で動いているわけじゃない。僕は、経済や貨幣にしても、政治にしても、言語の変形だという感覚を持ってきた。これは68年の思想なのかもしれない。

王寺 ただし、言語を例にとると分かりやすいと思うのですが、象徴秩序は決してあらゆるものを名づけ、秩序づけてしまうこともできません。常にどこかにほころびがある。言いがたいものに直面した時に初めて、主体も生まれるわけですね。そこから出発し、主体が言語によって規定されながら、もう一方で、言語を用いて象徴秩序をどんな風にスラすか、揺るがすかといったことも考えられるようになる。

◆ 資本主義の暴走

佐伯 そうですね。言語によってすべてをすくい上げることはできないし、できると思ってはならない。常に穴があいている。そこにユーモアがあり、シニシズム(皮肉)があると思っ

王寺 佐伯さんには、市場は人間が生きる社会のなかに埋め込まれた部分であり、そこでやりとりされるのは、あくまでも人間になにか有用性をもたらすモノである、という見方があると思います。だからこそ、社会のなかにある人間の力によって、市場を限定することもできるはずだ、ということになる。でも、今の資本主義にとって、社会はそんな「外枠」なんだろうか。先物取引のような金融の世界を考えるとイメージしやすいですが、資本主義はモノのやりとりや人間の社会から完全に離れて暴走しているんじゃない

経済や政治も言語の変形

かと思えるんですね。佐伯 産業資本主義の時代は、ミクロな営みとマクロな動きが連動していた。一人の人間が会社で一生懸命働けば、会社の業績が上がる。すると日本経済が良くなる。それがまた個人に戻ってきて、生活が豊かになる。アダム・スミスのいう「私益は公益なり」ですね。ところが70年代後半には、私益と公益が完全に離れてしまった。利益を上げようとするば、海外に工場を移してしまえばいいわけですから。今日の金融・情報経済になると、まったく私益の追求は公益にならない。この資本主義の暴走を止める手だてはいまのところありません。とすれば、逆にそのことを意識して、経済を抑制すれば多少は危機を先延ばしにできるかもしれません。

王寺 私は、産業資本主義の終わりとともに、労働の担い手が資本に対抗したり、それを転覆したりする展望が失われてしまったことが、68年から今に続く大きな問題だと思っています。もちろん、経済には還元されないような人間関係を、あちこちに維持していくことには賛成です。でも今、人間が資本の運動を制御するどんな手だてがあるんだろうかと考えると、悲観的になってしまっています。

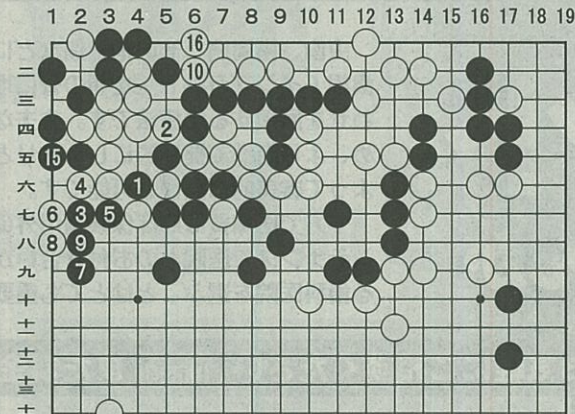
ただ、これだけ資本が自動的に動いているように見えてもなお、資本主義はどこかで人間や国家を必要としているらしい。その経済と政治のつながりをどこに見いだせるかが一つの鍵になるような気がします。その意味でも、フランスの68年は今も刺激的ではないでしょうか。学生を筆頭に、あらゆる種類の人たちがゼネストに参加した五月革命は、快調に機能し続けていた資本主義と国家が、何かの罫みでその機能をいったん停止するよう「出来事」だったからです。社会的な出自や地位とは無縁に、バラバラになった人間たちが、それでもなお、互いに議論し、語り合う、一つの「私」たちになり得る。そんな出来事が不意に起こり得る。これが「68年の思想」に忠実な、68年の理解だと思っています。

第四十三期 碁聖戦

戦戦局(116)再掲 本2第(103-116)から 黒101から

持ち時間各3時間 消費 白2時間58分 黒2時間0分 隅は西コウで白のつづれ 黒のつづれ 黒7で参考図

【第六譜】白2と分断 されて上辺の黒は目はない。黒3に白4と出る。黒5と切られて左上隅の白も目はなく、攻め合いである。白6のハネに対する黒7が到着になった。変化は割愛するが、白8と



棋王戦 五番勝負 第5局

先



【第十譜】(図は〇3四銀まで) 飛銀桂桂 歩六